

「気流の時代」完結編

後藤誠一

さん
(福岡県在住)



クリニックでクリニック! 日本を代表するオーディオファンが体験する カイザーチューニングの世界

「機器を買い替えて、音は良くなったけど何か足りない」「性能が上がれば上がるほど音楽が楽しめなくなる」。そんな悩みを解決させ、音質ではなく「音楽の感動を伝える」ためにタグを組んだカイザーサウンドの代表である貝崎静雄氏と林 正儀氏。この集大成として今回挑むのが、後藤誠一さんである。「西の横綱」と称され、日本を代表するオーディオファンである後藤さん。本業はお医者さんである。後藤クリニック内のあのハイエンド・オーディオルームで、カイザークリニックは果たして通用するのか? ぜひともお楽しみいただきたい。

●レポート:
林 正儀
Masanori Hayashi
photo by 光永典人



後藤誠一さんのシステム。アヴァンギャルドのトリオ+6バスホーンキットヒットのスーパートウイーター「HIT-ST1W」は4台使用している。マッキントッシュのスピーカー「XR290」は、同ブランドのアンプでマルチ駆動している



アヴァンギャルドはダン・ダゴスティーノのプリアンプ+ステレオパワーアンプ3台で駆動している

クリニックの集大成として
後藤先生と学び、検証したい

後藤誠一さんは、実は筆者と同県人で福岡県北九州市の戸畑区に在住の開業医。後藤クリニックの先生である。吉祥寺のジャズ喫茶メグでのイベント等でも度々お会いするのだが、後藤さんのオーディオにロマンをかける情熱には頭が下がる。

アヴァンギャルドのトリオ&バスホーン6台とマッキントッシュXR290という巨大スピーカー同居させるのは並大抵ではないが、先日も「トリノフを入れましたよ!」と弾んだ声で電話をいただいたばかり。これはコンピューター演算で位相管理まで行う、話題のサウンド・オブ・ティマイザーである。「これからは位相ですよ。3Dオーディオの時代の到来です」
そう言い切る後藤さんこそ、ロー

ゼンクラッツの連載にぜひご登場願いたい。前回の「気流の部屋」でもご紹介したとおり、同社にとって部屋環境作りこそが、いま最大のテーマになっているからだ。神の手を持つという貝崎さん曰く。「オーディオのメカニズムは人体のそれと生き写しなので、ドクターである後藤先生と相互に学び、検証していけたら……」

「後藤先生には大いに共感するところがあります。僕のオーディオクリニックの集大成だと思っっています」

密かに最強マシン・トリノフへのライバル心を燃やしつつある貝崎名人であった。

取材日の前日の話から
スイートスポットを探し
ピンポイントで解決する

後藤さんのもとと熱烈なレコードコレクターである。ある時オーディオにのめり込み、シヨップの協力も得ながら、コンポやケーブルを変えインシュレーターを替える試行錯誤でいままに至るわけだ。

貝崎さんの第一声は「バスホーンの位置がピッタリですね!」。見た瞬間にわかる貝崎さんの天性の感にも驚くのだが、まずはトリノフをオフし、素のままの状態トリノフの音を聴こう。試聴にあたっては、わざわざ60年代前後の曲を所望した。シンプルで高音質に録れているからだ。ビル・エヴァンスをしばらく聴いたのち、トリノフの5種類あるとい

うプリセット(補正值)での音をじっくりとチェック。測定マイクとインバルスでシビアにあわせこんだトリノフは、素晴らしい精度とバランスだ。いや、今回はトリノフの効果を聴きに来たのじゃないぞ。カイザーチューニングを体験してもらおうはずだが……。やはり貝崎さんは指摘し始めていた。

「どのモードでも気になるのは、瞬間のアタックが出ないことです」。どうも位相のズレを敏感に感じとっているようだが、原因はマッキントッシュのスピーカーにあった。バスホーンの開口部に被さるように設置されている状態なのだ。そうではなく、マッキンに当たった時、するつと逃げてミッドバスと位相的に調和するようにすればよい。とはい

貝崎さんは無言のままスピーカー立ち向かい、見事に折り合いをつけてきた。ためらうことなく、「センター側を15mm前へ、エンド(外側)を5mm前を出す。これで解決です!」

そうか、振りを浅くすればOKなわけで、それをピンポイントで解決してしまふ。いつもながら驚くしかない。トリオのチューニングについては、まだ本丸である本体の設置がある。さらにキットヒットのスピー

トワイターまで含めた、トータルのカイザーチューンが残っているだろう。これをいつの時点でどうトライするのか？ 気が気じゃない。

「電源対策」用として
秘密兵器を仕込んでおく



バスホーンは一旦ボルトを外し個々に動かすことにした

実は、取材は2日間である。前日は「現状の音を聴かせていただく」という予定のはずが、マッキンの移動まで進んだのはいいとして、もうひとつカイザーマジックがあった。電源ですよ、電源！ 後藤さんのオーディオルームは病院の中にあるわ

けで(音楽療法室だ)、他の部屋とは独立の専用電源にしているそうだが、影響を全く受けないことなど不可能なこと。家電やPCなど、インバーター機器のノイズにさらされている。そこでカイザーの秘密兵器、「電



電源タップへの差す位置を変えるだけで目の覚めるような大変化となった



昨夜マーキングしておいたバスホーンとキットヒットのスーパーツイーターの位置



キットヒットのスーパーツイーターを60mmほど後ろに下げ、奥行きや立体的なステージ感を出す



4人がかりでバスホーンを動かす

「エルエバンズ」でも 激変のチューニングを披露

若松の「エル・エバンズ」だ。若松は九州JAZZ発祥の地として知られ、このJAZZ喫茶ではアバンギャルトDuoが鳴っているという、知る人ぞ知るコアな場所なのだ。ここでハプニングはおきた。何曲か聴いたあと、突然貝崎さんが立ち上がり、「音をよくしましょう」とスピーカーケーブルの端末処理を始めたではないか。ほんの20〜30mmカットするだけで音は激変。エネルギーを注入されたかのように活力が増してクリアになり、女性ヴォーカルは濡れている。和田店長と後藤さんの驚きようはいうまでもない。何でよくなるの……。

「電源対策」が確実に効いてきた 空気感が変わり、熱気が溢れる

この夜の出来ごとが、それまでどうも半信半疑だった後藤さんの心に響き、翌日はさらに興味深い展開となる。「電源対策」がじわじわ効いたのか、

「マイルストーン」も「ヘリゲリエン」も音の鮮度が上がっている。S/Nが上がれば、音の出方がより活発で空気感も違う。熱気溢れる濃い演奏だ。女性ヴォーカルもニュアンスが増した。あの不思議なグッツが、タイミングとか抑揚感、感情表現などの要素を入れ込んでいるようだ。「スピーカーの前にエアカーテンがあり、その向こうでしか鳴っていない状態から、すっとぬけてきたでしょ」。トリノフの効果も高まる。気流だ、気流のマジックが起きている。これはうなずくしかない。

電源タップの対策 差す位置を変えるだけで 目の覚めるような大変化

であれば、もうひとつ。ラックに収められたダン・ダゴステイノやLINNのクライマックスDS、ルイミン、NAS……などの電源をとるタップの対策だ。すべては無理だが、手前に出ている3個のタップなら差し替える余地があるだろう。「2+6+2」のあわせて10口だ。どの位置にさしたらトータルの音として、いちばん折り合いがいいのか？ 貝崎さんのセンサーが鋭く感知。それまでの膨大な脳内データの中からベストな場所を探し当てるのか。ほとんど手が動いて作業は進む。わずかに数分の早業だ。2口は左右が入れ替わり、まん中の6口もすべて入れかわっていた。「僕の手が勝手に差し込んでくれというんです」。とても信じられるものではないが、

神の手とはこれだろう。貝崎流「加速度組み立て」や「戸籍簿管理」の実践編である。

これで音が変わらないわけがない。結果は目の覚めるような大変化。実践編である。



ケーブルの長さはカイザーゲージで「音のいい尺度」に調整する

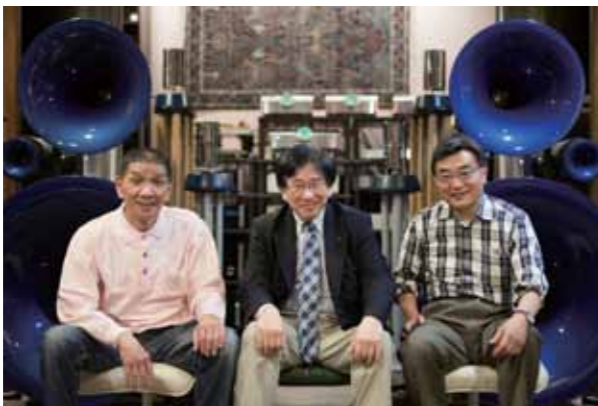


「Stream Reviver」の効果も実験。1台置くだけで部屋全体の気流をコントロールすることができる

後藤さんの情熱と温かい人柄に触れ、貝崎さん(写真左)にとっても、集大成に相応しい貴重な経験となった



スーパーツイーターのケーブルもローゼンクランツ製に交換する



私たちは極上の空気を買うために アンプやスピーカーを使うのだ

濃密に、深度感もアップしたではないか。リスナーの近くまで届き、部屋の中／3くらいまで来たかというイメージである。

ミッドバスツイーターを移動 貝崎さんの完成と手のみで すべての音像が鮮明になる

さあ下地が整ったら、DUOの設置直しにかかる。もちろんバスホーンではなく、青いホーンのミッドバスツイーターユニットの方である。昨夜テープでマーキングしていた位置から、どうずらすのか？ 「これは相当狂っていますね。奥により過ぎています」

音も聴かずに、「右を約21〜22mm前へ、左が18mmあたりです」と断定。「僕はいま動かす手こたえがピンピンきてるんです」とテンションが上がる貝崎さんである。

だが移動は大変だ。ベースは動かさず、ホーンの乗ったアングルのみ平行移動するわけだが、キットヒットのスタンドと連動し、ボルトでがっちり固定されている。そこで、一旦ボルトを外し個々に動かすことにした。4人がかりの作業である。

さらに再調整で、右が18mm、左が14mmに追い込んだわけだが、それでも「もともと設置の完成度が高いた

源対策」なるアイテムを使ってみよう。12VのUSBの充電器が付きて、その微弱なノイズをAC電源に入れることで波を平滑する。と貝崎さんは説明する。まあ漢方薬的なもの、コンセントにさすだけでOKな不思議な装置である。効果は翌日出るそう、1〜2枚聴いたあとそのまま、クルマである場所へと向かった。

「エルエバンズ」でも 激変のチューニングを披露

若松の「エル・エバンズ」だ。若松は九州JAZZ発祥の地として知られ、このJAZZ喫茶ではアバンギャルトDuoが鳴っているという、知る人ぞ知るコアな場所なのだ。ここでハプニングはおきた。何曲か聴いたあと、突然貝崎さんが立ち上がり、「音をよくしましょう」とスピーカーケーブルの端末処理を始めたではないか。ほんの20〜30mmカットするだけで音は激変。エネルギーを注入されたかのように活力が増してクリアになり、女性ヴォーカルは濡れている。和田店長と後藤さんの驚きようはいうまでもない。何でよくなるの……。

「電源対策」が確実に効いてきた 空気感が変わり、熱気が溢れる

この夜の出来ごとが、それまでどうも半信半疑だった後藤さんの心に響き、翌日はさらに興味深い展開となる。「電源対策」がじわじわ効いたのか、

め、ここからのチューンも楽しんで「すよ」と貝崎さん。ヴォーカルものを聴くと、とても超大型のスピーカーと思えない音だ。音源が分散せず、位相ずれなんかない。もちろんタイムミングも呼吸感もピシッと揃う。部屋の空気がよく動き、すべての音像が明晰・鮮明で、ゾクゾクとくるほどリアルなことに感嘆する。

リスナーの聴覚と心に届くサウンドがここに出現。後藤さんも満足の様子である。「ウェイブ・ジョビル」やバックミュージックがまさに眼前に広がるようで、何ともハッピーで艶かしい。

あまりのヌケのよさに、カメラマンさんまで「トリノフが入っているみたいですね。プレジジョンモードでしょう？」と声をあげたほどだ。実際は、スルーである。感性と人の手のみで、この領域まで到達できるのはスゴイこと。

キットヒットを60mm下げて 奥行きや立体感が出てくる

このあとキットヒットのスーパーツイーターを60mmほど後ろに下げ、奥行きや立体的なステージ感を出す工夫を惜しまない。私は立ち会えなかったが、マッキントッシュのスピーカーについて、も、空気が動くようにキメ細かなチューニングを施し、これまた素晴らしいサウンドとなったのだ。さらに気流アイテムの「ストリームリバイバー」「サウンドリボルバー」など

も持ち込み、とことん納得できるまでカイザー劇場は続く……。今日ばかりは達人のワザを讀めるしかないだろう。これでトリノフの能力が、一段と引き立つのは間違いない。

取材を終えて 稀にみる調整術の秘密を 医学的にも知ってみたい

コンピューターと人間はやはり協力、共存すべきだ。と妙に悟った今回の取材である。後藤さんは「JAZZ批評」のメイン執筆者でもあり、世界中から優秀なプレイヤーを見つけて出す音楽への情熱と、造詣の深さ。そして暖かい人柄に、本当に感激した。ありがたうございました！ 貝崎さんは神の手のような、希にみる調整術の秘密を、医学的に知りたいたいという。脳内データで動くイルカのような本能だろうか。かなり愚直な質問だが、後藤さんは笑みを浮かべながら、人間の脳や神経のはたらきやさまざまな現象(症状)にも触れ、まだまだ解明されていないことが多いことを説明された。貝崎さんにとっても、集大成に相応しい貴重な経験であろう。

気流の旅も最終章となったようだ。私たちは目に見えない空気のおいしいカクテルが耳に届いたときに、はじめて音楽の感動を手に入れることができる。いいかえると、極上の空気を買うために、アンプやスピーカーを使う。このことにぜひ気づいて欲しい。